

特集 | 笑日本語教室には福来る!

The Monthly Nihongo

月刊

日本語

日本語を
教えたに
あなたに
応援マギ
ジン

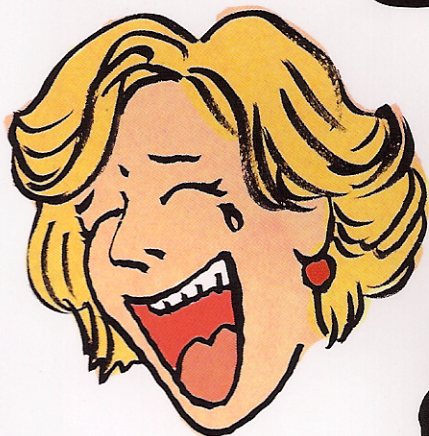
09
2011 September



特集

今こそ、教室に笑いを!!

Laugh & Peace



香山リカさんに聞く

こんな時だからこそ笑おうよ

柳家さん番師匠

アメリカで

日本語学習者と出会う

「笑い」に学ぶコミュニケーションスキル

目指せ! 好感度ナンバーワン授業

留学生が描く4コマ漫画

日本に来て驚いたこと



異文化に学ぶ
長倉洋海さん
写真家

特別企画
養成講座に行こう!

アルク
www.alk.co.jp

平成25年9月1日発行(第24巻第9号・通巻285号) 毎月1回1日発行 昭和59年6月6日第三種郵便物認可

柳家さん喬師匠



特集
Laugh
&
Peace

アメリカで 日本語学習者と 出会う

日本を代表する笑いといえば、何といっても、落語ですよ！
この落語と小噺こぼなしを日本語教育に活用するユニークな試みが、
アメリカで行われています。その仕掛け人が、
ミルベリー大学日本語学校校長の知佐一味さん。
毎年7月に10日間のプログラムを開催しています。そして、
この取り組みを2006年度の1回目から支えてきたのが、名実共に
落語界を背負って立つ柳家さん喬師匠とその弟子筋に当たる
柳亭左龍師匠と林家二楽師匠。毎回、空路はるばる現地に赴き、
落語を聞かせ、小噺を指導しています。
今回は、さん喬師匠と知佐さんの対談をお届けします。

取材・文・写真＝関根えり 取材協力：ミルズ大学(カリフォルニア州オークランド)



落語の笑いは、 海外で通用するのか

柳家さん喬師匠(以下、さん喬) 私は、落語というものは日本人だけに理解されるものと思っていたのですが、ある年、世界中から笑いを職業とする人がパリに集まるといったお祭りに招かれまして、高座に上がったんです。「外国人に落語の笑いは伝わらないだろう」と高をくくっていたところ、思いもかけない大きな笑いをいただきました。なるほど、笑いというものは、ハートで繋がることのできるものなのだ、といった印象を受けたんです。その経験から3年くらい経った時、畑佐校長から、「アメリカに来てくれないか」というお話をいただいたんです。「笑いは世界共通なんだ」という自信を持ちはじめたころだったので、タイミングが良かったというか、運命だったのでしょうか。

畑佐 実は、小さいころから落語に興味を持っていて、知り合いから、師匠が大学で留学生に落語を披露していらっしやると聞き、思い切って、お誘いしてみました。とはいえ、師匠ほどのお方が、わざわざ来てくださるとは思っていなかったのですが、案外、二つ返事でしたね(笑)。

さん喬 お会いしてすぐ、「この人なら間違いない」と(笑)。でも、最初は、アメリカの生徒たちに受け入れられるかどうか緊張しましたよ。初日の高座で60人くらい来てくれたのかな？ 笑いをたくさんいただいたときは、ほっとしました。

本物に接することの 学習効果とは

畑佐 師匠の落語に生で接する感動は、とても強いインパクトを生徒たちに与えますね。自分たちに与えられている「授



学生が披露した小噺の一例 「猫の名」

夫婦が猫に名前を付けることになりました。

妻 「この猫の名前は何かいいかしら」

夫 「強そうな名前がいいな。

太陽はどうだろう」

妻 「でも、雲が出たら、隠れてしまうわよ」

夫 「じゃあ、雲か？」

妻 「でも、風が吹いたら、吹き飛んじゃうよ」

夫 「じゃあ、風か？」

妻 「でも、壁はびくともしないよ」

夫 「じゃあ、壁か？」

妻 「でも、ネズミがガジガジやるよ」

夫 「じゃあ、ネズミか？」

妻 「でも、猫のほうが強いよ」

夫 「わかった。じゃあ、この猫の名前は猫だ！」



業の贅沢さ」を生徒たちも肌で感じ、できるだけ多くのことを学ぼうと目の色が変わり、落語の文化や時代背景も、自分たちで研究しようとしています。

さん喬 校長は、落語は素晴らしいものだ、生徒に押し付けたりしないんですね。でも、生徒のほうから、どんどん落語に興味を持っていくのが見えます。これが本来の教育なんでしょうね。

畑佐 例えば、「時そば」の、師匠の「そーばー」の台詞でパッと舞台の空気が変わりますね。“本物”を聞く、見る、生徒たちの表情も、真剣そのものです。プロに対する敬意の姿勢ですよ。

さん喬 「時そば」でいえば、生徒たちのリアクションが、面白いですね。欧米では、食事中は音を立てない風習があるんですね。擬音も、言語文化に存在しないのに、僕が豪快に音を立てて蕎麦を食べる場面で、皆さん、笑っていますね。



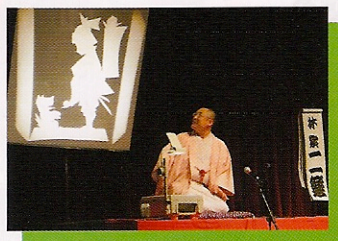
柳家さん喬
柳家
 実力と人気を兼ね備えた
 落語界の第一人者。

蕎麦は麵が細いからこんな音、うどんは太いからこんな音、と出すと、喜んでくれます。「ああ、こういう文化の違いもある」と思いました。

畑佐 アメリカ人の感動の仕方は日本人に比べて素直だと思います。二楽師匠の紙切りでも、師匠が紙を切っていると、「あれは何だ、何だ」と、ざわざわしだし、切り終わって、絵を見せた瞬間、「ウワー!!」と大歓声が湧き上がりますね。日



ダイナミックな語りで、200人の観衆を爆笑の渦に巻き込んだ柳亭左龍師匠。



驚きと感動を与えた林家二楽師匠の技。「トトロ」や「忍者」の紙切りも披露した。

本では、見られない光景ですよ。

さん喬 そうですね。日本では「プロなら、できて当たり前」といったような捉え方をするので、ドライです。アメリカ人は、おおらかに笑うし、その感動が舞台にも伝わりますね。

小唄で変わった、生徒の表現力

畑佐 2年目から、生徒たちによる小唄の発表を取り入れましたが、おとなしい生徒が、大きな声で話すようになってきたり、人前で話すことへの抵抗感がなくなりましたね。また、日本語を正しく聞き取ってもらえないと笑いが取れないので、発音が上達しました(笑)。小唄は、同じ話を、繰り返し練習するので、発音や間の取り方など、日本語の発話力が上達していきます。これはオマケですが、覚えた小唄は、日本人に会ったときに、彼らを驚かす“技”にもなるようです(笑)。

さん喬 それは、いい(笑)。

畑佐 教員たちもいろいろ工夫するようになり、最近、落語の題目の大筋を読ませておいて、落ちを生徒たちに考えさせる授業を始めましたが、これは当たりでしたね。生徒たちがアイディアを持ち寄って考えた落ちを師匠が演じてくださいましたが、中にはオリジナルを超えるようなものもありましたね。

さん喬 彼らが作った落ちを実際に演じると、面白かったり、受けなかったり、といったドラマが生まれるんですよ。受けなかったときは、「かわいそうだなー」と思うけど、こちらの狙いは当たっ

ていますね。

畑佐 そうなんです。話の続きを、日本語で考え、作る、というのが狙いだから、受けなくても、それはそれで、彼らの学びになるんですよ。この「落語授業」は、聞く、作る、話すといった三重構成になっているので、生徒たちが、がんばって聞き取り、日本語をしゃべる意欲をかき立てるプログラムになりました。

さん喬 観客に笑っていただく喜びは、万国共通ですよ。生徒たちも、観客との一体感を味わっていますし、私に、笑わせる技術を直接、質問してくる生徒もいます。

落語と小噺の魅力を世界に広めたい

畑佐 このプログラムで目指しているのは、アニメやマンガといった興味から入る日本語教育のパターンを崩したいなということ。日本には、他にも、たくさん興味を持てる文化があることを知って、興味や知識の幅を広げてほしいのです。

さん喬 アメリカの生徒は、一つのことに興味を持つと、それをとことん極める人が多いみたいですね。

畑佐 ええ、ここで落語に出会ったことがきっかけになり、落語をテーマにした論文を書いた学生もいました。

さん喬 実際に、ミドルベリーの日本語学校の生徒たちは、大勢、日本に留学していますね。これまで、何人かミドルベリーで教えた生徒が私を訪ねて、寄席に来ましたよ。彼らが、漫画喫茶に泊まるというので、宿泊できるお寺を紹介したこともあります。

畑佐 えー、そんなことがあったんですか！他にも、訪ねて行った生徒に、お寿司をご馳走していただいたとか……。このまま師匠のファンが増えて、団体で訪ねられるようになると……。



さん喬 それは、大変だ(笑)。

畑佐 生徒たちが発表する小噺は、ビデオでも撮っていて、今後、動画サイトYouTubeなどにアップして世界中の人に公開し、小噺を利用した日本語教育を世界に広げたいと考えています。ウェブ上で、「小噺のワールドカップ」など、企画したいですね。

さん喬 最近は、生徒たちの小噺のレベルも上がりましたね。ただ覚えるだけではなく、自分の言葉として語っている生徒も増えています。世界の人が、落語や小噺に興味を持ってくれると、うれしいですね。

パデュー大学教授／ミドルベリー大学日本語学校校長
1983年から、アメリカで
日本語教育に携わっている。

畑佐一味

